

大日房能忍とその禅 : 『日蓮遺文』から読み取る

著者	古瀬 珠水
雑誌名	鶴見大学佛教文化研究所紀要
号	19
ページ	188-206
発行年	2014-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000012



大日房能忍とその禅——『日蓮遺文』から読み取る——

鶴見大学仏教文化研究所所員 古瀬 珠水

はじめに

大日房能忍及びその禅宗については、既に筆者が拙稿において少しく述べてきた⁽¹⁾。特に、「日蓮関係文書に表れる大日房能忍とその禅について」では、大日房能忍が「禅宗」を弘めたこと、能忍の禅は「教外別伝」であり、当時大變流行していたことなどを論じた。

本論考では、上記の拙稿で扱わなかった『日蓮遺文』の中で、能忍または能忍の禅について記述していると思われる部分を取り上げ、更に、その実像に迫ってみたい。尚、日蓮関係の研究者に依れば、『日蓮遺文』は日蓮による真筆と偽筆があり、それらを確定する研究が現在も行われているという。今回、筆者は『昭和定本日蓮聖人遺文』に掲載される全てを日蓮による遺文として扱った。『日蓮遺文』、『見性成仏論』などの資料は、読みやすいように漢字とひらがな交じりの訓読文に変えた。判読不能のことばは□で書き、推測されることばは筆者が()で補った。又、必要に応じ引用文に「」や『』などを付した。『見性成仏論』は『金沢文庫資料全書仏典第一巻禅籍篇』を参考にした。

(1) 「大日」と記された禅宗批判

上記拙稿において指摘したが、『日蓮遺文』において、「大日」と明記して記述しているものは以下の五点である。

・『教機時國鈔』

「建仁より已來今まで五十餘年の間、大日佛陀、禪宗を弘め、法然・隆寛、浄土宗を興し、實大乘を破して權宗に付き、一切經を捨てて教外を立つ。譬ば珠を捨てて、石を取り、地を離れて空に登るが如し。」²⁾

・『安國論御勅由來』

「然るに後鳥羽の院の御宇、建仁年中に法然・大日として二人の増上慢の者有り。惡鬼其の身に入て國中の上下を狂惑し、代を擧て念佛者と成り、人毎に禪宗に趣く。」³⁾

・『法門可被申様之事』

「叡山の正法の失るゆえに、大天魔日本國に出來して、法然大日等が身に入、此等が身を橋として王臣等の御身にうつり住み、かへりて叡山三千人に入るゆえに、師檀中不和にして御祈禱するしなし。御祈請するしなれば三千の大衆等檀那にすてはてられぬ。又王臣等問ふ。天台眞言の學者に問て云く、念佛・禪宗等の極理は天台・眞言とは一かたとわせ給へば、名は天台・眞言にかりて其心も辨ぬ高僧の天魔にぬかれて答て云く、禪宗の極理は天台眞言の極理なり、彌陀念佛は法華の肝心なり、なんど答へ申すなり。而るを念佛者禪宗等のやつばらには天魔乗りうつりて、當世の天台眞言の僧よりも智慧かしこきゆえに、全くしからず禪ははるかに天台眞言に超えたる極理なり。或は云く、諸教は理深、我等衆生は解微なり。機教相違せり得道あるべからず。なんど申すゆへに、天台眞言等の學者、王臣等の檀那皆奪ひとられて御歸依なければ、現身に餓鬼道に墮ちて友の肉をはみ、佛神にいかりをなし、檀那をすそ（呪咀）し、年々に災を起し、或は我生身の本尊たる大講堂の教主釋尊をやきはらい、或は生身の彌勒菩薩をほろぼす。」⁴⁾

・『開目鈔』

「建仁年中に法然・大日の二人出來して念佛宗・禪宗を興行す。法然云く、法華經は末法に入ては未有一人得者

千中無一等云云。大日云く、教外別傳等云云。此兩義國土に充滿せり。天台眞言の學者等、念佛・禪の檀那をへつらい、をづる事、犬の主にををふり、ねづみの猫ををそるるがごとし。國王將軍にみやつかひ、破佛法の因縁・破國の因縁を能く説き能くかたるなり。⁵⁾」

・『佐渡御書』

「法然が人類・大日が人類念佛宗禪宗と號して、法華經に捨閉閣抛の四字を副へて制止を加て權經の彌陀稱名計を取立て、教外別傳と號して法華經を月をさす指、只文字をかぞふるなど笑ふ者は、六師が末流の佛教の中に出來せるなるべし。⁶⁾」

以上の記述から、①能忍は「禪宗」を弘める、②能忍の教団は自らを「禪宗」と呼んでいた、③能忍は高僧・学僧であつた、④能忍の禪は「教外別傳」、⑤能忍の禪は大流行した、ことを上述の拙論で述べた。また、能忍が「法華經は月をさす指」と言つていたことも日蓮によつて指摘されている。

(2) 記名無しの禪宗批判

①『念仏者追放宣状事(山門申状)』に記述された大日房能忍

日蓮は、人物名を記さずに禪宗を批判している場合も多々あるが、「禪宗云く」、「禪家云く」と記されるときも、大日(房能忍)について記述されている場合があることが解つた。特に以下『念仏者追放宣状事(山門申状)』は明らかに能忍を示唆する遺文である。

「近來二つの妖怪有り。人の耳目を驚す。所謂達磨の邪法と念佛の哀音なり。顯密の法門に屬せず。王臣の祈請を致さず。誠に端拱にして、世を蔑り暗證にして人を輕んず。小生淺識を崇めて見性成佛の仁と爲し、耆年

宿老を笑ふて、螻蟻蟲蛆の類に擬す。論談を致さざれば、才の長短を表さず。決澤に交らざれば、智の賢愚を測らず。唯、牆壁に向ふて獨り道を得たりと謂ひ、三衣纒に紆ひ七慢専ら盛なり。⁽⁸⁾」

上記「近來二つの妖怪有り。人の耳目を怪す。いわゆる、達磨の邪法と念佛の哀音なり。」とあるが、この二人の妖怪とは、大日（房能忍）と法然であることは、他の『日蓮遺文』に於いて法然と大日を並べて批判する記述から明らかである。

・学問知識を否定、聖と凡を分けず

上記『念仏者追放宣状事（山門申状）』の記述で能忍の特徴・行実を語る三点が見いだせる。

それは、第一に「小生淺識を崇めて見性成佛の仁^{ひと}と為し、耆年宿老を笑ふて、螻蟻蟲蛆の類に擬す。」と、深い学識を持たない人も見性して成仏できることを認めている。天台宗における出家僧のように、経論を学び、厳しい修行を経た人物だけが仏果を得ることを否定している。また、知識豊富な年長者を崇めない方針であったことも理解できる。このような態度は、以下、『新池御書』にも「大日」と明記されていないが、「禅宗」として記述されており、やはり能忍のことを記述していると考えられる。

「今時の禪宗は大段仁・義・禮・智・信の五常に背けり。有智の高徳をおそれ、老いたるを敬ひ、幼きを愛するは内外典の法なり。然るを彼僧家の者を見れば、昨日今日まで田夫野人にして黒白を知らざる者も、かちんの直綴をだにも著つれば、うち慢じて天台眞言の有智高德の人をあなづり、禮もせず其上に居らんと思ふなり。是傍若無人にして畜生に劣れり。⁽⁹⁾」

日蓮は「今時の禪宗は大段仁・義・禮・智・信の五常に背けり」と述べ、「禅宗」つまり能忍が儒教の礼節を欠いていたように描写しているが、それは、能忍が仏教学問を重ね、知識を豊富に持つ僧侶を尊敬しない点を、日蓮が強く非難しているためであろう。また、『新池御書』には「昨日今日まで田夫野人にして黒白を知らざる者も、かちん⁽¹⁰⁾

の直綴をだにも著つれば」とあり、一般の人々に教えを説き、僧侶にさせていたことも伺える。恐らく、一般の人々を仏門に入門させるのに際し、伝統的な受戒を行っていなかったことも考えられる。虎関師練撰『元亨釈書』『栄西伝』の中で、師練が能忍を批判して「已に師承乏しく亦戒檢無し」と述べていた根拠と考えられよう。また、上記「昨日今日まで田夫野人」に「尼僧」を含むか否かは解らないが、能忍が「尼無求」から援助を受け、『伝心法要』の後半部分を出版していたことは「真福寺新出初期禅宗聖教断簡」⁽¹²⁾によって明らかにされている。「尼無求」が能忍の教えの下に尼僧となつたか否かは判らないが、少なくとも能忍が女性と関わりがあつたことは事実であろう。また、同、「五七左」の「仮名法語」には、

「爾栗原女房、夫（れ）仏道修行は先つ浅き所より修行して、深き所をも悟るべきなり。浅所と申は、世中に心にて知る外の者は皆あだなる物にて、夢まぼろしの如しと知るべし。」⁽¹³⁾

とあり、やはり一般女性に対し禅について説いている部分がある。「仮名法語」が能忍に関わるものか否かは解らないが、「尼無求」による能忍への浄財の後に書かれた法語が、能忍と何らかの関係があるとは考えられないだろう。さらに、能忍が一般の人々から多くの支持を得て、天台宗を凌駕していたことは、前述の『開目鈔』や『法門可被申様之事』にも述べられている通りである。⁽¹⁴⁾また、「昨日今日まで田夫野人」と述べ、長い期間の厳しい修行を経ずともさとりを開くことができることを示唆している。

さて、右記のような「禅宗」つまり能忍の態度は、能忍に関わる法語とみられる『見性成仏論』⁽¹⁵⁾にもみられる。例えば、大珠慧海のことばを引用して、「頓に上乘を悟れば、凡を超す、聖を超ふ」⁽¹⁶⁾とある。聖と凡を分けて考えない点で、『念仏者追放宣状事（山門申状）』の能忍の記述と合致する。さらに、学問仏教に対する批判や天台宗で行われる厳しい修行に否定的な点も『日蓮遺文』の記述と共通していることが解る。

・議論・論破を避ける

第二に、「論談を致さざれば、才の長短を表さず。決澤に交らざれば、智の賢愚を測らず。」とあり、能忍が他人と議論をしたり、相手の意見を論破するようなことをしなかつたことが書かれている。このような態度は、『聖光上人伝』に、浄土宗の聖光上人（≡弁長）が大日（房能忍）と会った時のことを以下のように記述している。

「上人彼の禪室に到りて、難じて法門を問ず。（中略）禪師口を閉じて下を結ぶ。答えずして讚えて曰く、汝是れ文殊師利菩薩。我に訓じる為に來たか云云。」¹⁹

また、虎関師練撰『元亨釈書』『柴西伝』でも能忍の態度について以下のように記している。

「西、又、忍と宗義を抗弁すること往反數番す。忍、口を杜て退く。」²⁰

以上『聖光上人伝』、『元亨釈書』の能忍の記述から、やはり『念仏者追放宣状事（山門申状）』の「妖怪」の一人（ひとつ）は能忍であることは確かであろう。また、当時、僧侶たちは持論を主張するために、他人と議論をし、相手を論破することが己の正当性を示すために行われていたようだ。しかし、禅宗においては概念的なものごとを括り、ことばに捉われて人と議論をしたりすることは、「向下」²¹である。能忍は、実際入宋し、中国の禅寺で修行してきたわけではないが、書物を通じて禅宗の方法論を身に着けていたと考えられるであろう。²²但し、能忍は持論を語る場合は、臆することなくはっきりと話す様子は、『日蓮遺文』『法門可被申様之事』に能忍のことばとして以下のように述べる。

「全くしからず禅ははるかに天台眞言に超えたる極理なり。」²³

また、頼瑣撰『顕密問答鈔』には「禅門の人」のことばが記されている。筆者は「禅門の人」は能忍を指していると考えているが、その人が「顕密の二藏は鼠婁栗の如し。祕藏亦因の中に従つて、心宗に入るが故に。」²⁵と言う。「鼠婁栗」の明確な意味が不明であるが、「顕密の二藏」は「結局、心宗（≡禅宗）に入るようなもの」と批判している態度が見て取れる。

・坐禪を専らしていた

第三は、「唯、牆壁に向ふて獨り道を得たりと謂ひ、二衣纒に紆ひ七慢専ら盛なり。」の一文である。能忍が坐禪を専らしていたことがこの一文で明らかになる。日蓮が妖怪と称する能忍が「壁に向かつて坐禪をしていた」記述から、『法華初心成佛鈔』における以下の一文も能忍のことを指していると考えられる。

「禪宗には餘の一切經をば教内きらひと簡て、教外別傳不立文字と立て、壁に向ひて悟れば禪宗獨り勝れたりと云ふ⁽²⁶⁾」
同様に『萬法一如鈔』には以下のように坐禪について述べる。

「或は禪宗の者は此不變眞如の處にもとづかんと面壁工夫するなり。此の一理を本來の面目とも云ひ、心性の月とも云ひ、未生已前の本法とも云ふなり。されば、有にも非ず無にも非ず。青・黄・赤・白・黒の色にも非ず。長・短・方・圓の形にも非ず。言語を以ても宣説すべからず。心行を以ても思度すべからず。只教外別傳不立文字、直指人心見性成佛と云て、我と心性を見あきらめんと云なり。修多羅の教は月さす指の如しと云て諸教の文字を立てず。諸經論の文字は皆迷の文字なり。今此迷の文字を集て法華等の修多羅の教と云ふ⁽²⁷⁾。」

『法華初心成佛鈔』の「壁に向ひて悟れば禪宗獨り勝れたりと云ふ」、及び『萬法一如鈔』の「禪宗の者は此不變眞如の処にもとづかんと面壁工夫するなり」は、いずれも壁に向かつて坐禪⁽²⁸⁾をしていたことを明らかにしている。どちらも大日(房能忍)の記名はないが、「一切經をば教内きらひと簡て」、「教外別傳」、「修多羅の教は月さす指」など日蓮が能忍を批判するとき用いる語句が書かれており、両者の「禪宗」とは明らかに能忍であることは疑いがない。

ところで、『見性成仏論』では(能忍と推測される)作者(または問者)が坐禪を行なっていたこと、また、坐禪もせずに悟りを得た人物がいたことなどが明らかにした⁽²⁹⁾。さらに、『興禪護国論』の「達磨宗」の記述は、「達磨宗」が「只だ応に偃臥を用うべし」と、坐禪の不用性を述べている点は、能忍の坐禪好きとは異なることも指摘しておきたい。

② 「法華経は月をさす指」

さて、日蓮が大日（房能忍）を批判するときのキーワードは、主に「教外別伝」であるが、「法華経は月をさす指」と述べることも多々ある。

『法華初心成佛鈔』には、

「禪宗には余の一切経をば教内と簡て、きらいひ教外別傳不立文字と立て」とある。また『妙法比丘尼御返事』には、

「禪宗と申す宗は眞實の正法は教外別傳なり。法華経等の経々は教内なり。譬へば月さす指、渡りの後の船、彼岸に到りてなにかせん。月を見ては指は用事ならず等云云。(32)」

『諫曉八幡抄』には、

「一切の禪宗云く、我宗は教外別傳と申して、一切経の外に傳へたる最上の法門なり。一切経は指のごとし。禪は月のごとし。天台等の愚人は指をまほて月をしらず。法華経は指なり。禪は月なり。月を見て後は指は何のせんかあるべきなど申す。(33)」

とある。いずれも禪宗は教外別傳であることを明言しているほか、法華経を指に譬えている点も共通である。ところで、『見性成仏論』に「ユヒヨマホリテ月ワスレ」という言葉が出てくる。「ユヒヨマホリテ」は、『諫曉八幡抄』の「天台等の愚人は指をまほて月を知らず」の「指をまほて」と同句を使い、『見性成仏論』の作者も『諫曉八幡抄』の「禪宗」の人々も、天台宗が法華経を大事にするを「指を守る」と表現していたことが理解できる。日蓮の批判する禪宗の人々も、『見性成仏論』の作者との関係を深く感じる一文である。しかもここでは「一切の禪宗云く」とあり、能忍以外の禪宗の人々も、天台宗が法華経に論拠を見出し、常に法華経に固執することを「指をまもる」と言っていたようである。『見性成仏論』が当時広く流布し、「天台は指（法華経）をまもりて」ということばが浸透していたとは考えられないだろうか。

③法然と併記する場合

次に法然と並べて「禪宗」や「禪家」と記述する場合を見てみよう。

『眞言諸宗違目』に、

「法然が捨閉闍拋、禪家等が教外別傳⁽³⁵⁾」

『呵責謗法滅罪鈔』に、

「日本國の一切衆生は法然が捨閉闍拋と禪宗が教外別傳との誑言に誑らかされて、一人もなく無間大城に墮つべしと勘へて（後略⁽³⁶⁾）」

『下山御消息』に、

「法然は捨閉闍拋と云云。禪宗は法華經を失はんがために教外別傳・不立文字とのゝしる⁽³⁷⁾。」

『賴基陳狀』に、

「法然上人云く、法華經を念佛に對して捨閉闍拋、或は行者は群賊等云云。禪宗云く、教外別傳不立文字云云⁽³⁸⁾」

『教行證御書』に、

「善導・法然の餘行非機の目、禪宗が教外別傳の所見は、東西動轉の眼目、南北不辨の妄見なり⁽³⁹⁾」

とある。上記の「禪家」及び「禪宗」はいずれも大日（房能忍）を示していることは、他の『日蓮遺文』において日蓮が法然と併記している書き方から明らかであり、「禪宗」とは能忍のことと理解して大過ないであろう。但し、右の五つの『日蓮遺文』では、なぜ日蓮が法然の名前は明記して、大日（房能忍）の名は記さなかったのかは、疑問に残るところである。その理由の一つは、日蓮にとって法然は常に強く批判する対象者であったが、大日（房能忍）は法然に比べれば、批判する気持ちが少し薄かったのかもしれない。また、別の理由としては、能忍の教外別傳の禪が人々の間に広く流布し、禪宗に属する人々が「教外別傳・不立文字」と標榜していた可能性も推察できる。日蓮は

遺文の中で、禅宗を批判するとき柴西については記述していないようで、日蓮からみた柴西の禅は明らかに「教外別伝」の禅ではなかったであろう。同様に、（聖一・道隆は批判対象であっても）道元についての記述が見られない点も、甚だ興味深い。

(3) 大日(房能忍)の語ることは

上記、『念仏者追放宣状事(山門申状)』では、能忍の行動や態度を垣間見ることができた。また、「大日」と記さずに「禅宗」や「禅家」といった場合、能忍のことを指す場合があることが解った。

前節の坐禅の項目で引用した『萬法一如鈔』を今一度見てみると、興味深い文言がある。それは、以下の如くである。

「禅宗の者は此不變真如の処にもとづかんと面壁工夫するなり。此の一理を本来の面目とも云ひ、心性の月とも云ひ、未生已前の本法とも云ふなり。」

「面壁工夫」が「本来の面目」、「心性の月」、「未生已前の本法」であるという。「本来の面目」、「未生已前」は、禅語録にもしばしば登場するが、「心性の月」は、能忍のオリジナルのことばと考えられよう。尚、『見性成仏論』にも「心性」の語句がしばしば出てくる。

次に、『法華大綱鈔』には、

「又禅宗は加様の事をば知らず。己、佛に均しと謂ふと云て未断惑の凡夫にして佛と同位なりと申す、天魔の所爲なり。」⁽⁴⁾

とある。日蓮が天魔と呼ぶときは、ほぼ能忍のことを指しているのです、ここの「禅宗」が「天魔」とあるので、やはり能忍のことを述べていると考えられる。その「禅宗」（＝能忍）が「己、佛に均しと云て未断惑の凡夫にして佛と同位なり」と言っている。前述の「聖凡分けず」の考え方と同じであるが、『見性成仏論』には同様の一文が、以下

のように大珠慧海のことは引用して述べている。

「佛と衆生と一種なれば、衆生即ち是れ世尊なり。」⁽⁴²⁾

更に、『早勝問答』には、「禪天魔」について以下のような問答がある。

「禪宗問答。問ふ。禪天魔故如何。答ふ。一義に云く、佛經に依らず故なり。一義に云く、一代聖教を誹謗する故なり。問ふ。禪とは三世諸佛成道の始（め）は坐禪し給へり、如何。答ふ。一義に云く、汝が坐禪は佛の出世に背かば天魔治定なるか。又、坐禪は大小の中には何ぞや。一義に云く、佛の端坐六年は法華に無益と云ふか。問ふ。禪法には佛説無益なり。答ふ。一義に云く、是れ自義なるか經文なるか。一義に云く、やがて是が天魔の所爲なり。（中略）問ふ。常好坐禪深入禪定常貴坐禪とも説けり、如何。答ふ。一義に云く、文段を以て責むべしなり。一義に云く、此の文は法華無益と云ふ文なるか。一義に云く、此の文を以て禪宗を建立するか。問ふ。唯獨自明了餘人所不見と云ふ。故に禪宗ひとり眞性を見て餘人は見ずと云ふなり。」⁽⁴³⁾

前半に「禪天魔」、「佛經に依らず」とあるので、能忍を指していると考えられる。後半には、「常好坐禪深入禪定常貴坐禪」と言い、坐禪を専ら行っていたことが解る。加えて、「唯獨自明了餘人所不見」、「禪宗ひとり眞性を見て餘人は見ず」と言っていたことも明らかである。禪宗のみが「眞性を見る」ことができるとは、禪宗が顕密を超えていると語っていたことを示している。これは、『悲想伝授抄』における「達尸宗は理教なり。大日御房云く、達尸宗は顕密二宗を超ゆ。是れ心宗なり云々。」⁽⁴⁴⁾や『法門可被申様之事』の「全くしからず禪ははるかに天台眞言に超えたる極理なり。」⁽⁴⁵⁾と云う能忍の言動と一致する。

最後に、『禪宗天台勝劣鈔』の問答を見てみよう。

「問ふ。禪宗・天台宗何れ勝れたりと云ふべきや。答ふ。天台宗勝れたり。これに付て、禪宗をば又は佛心宗と云ふ。我が心佛なるが故なり。或いは教外別傳とも云ふ。（中略）教外に別傳ありと云はんは、天魔・外

道・上慢破法墮惡の者なるべしと云ふ證據なり。故に、教外別傳とは全く佛法に非らずと云ふべきなり。設
ひ録等に此旨ありとも、録は人師の釋なり。佛説に非らず、信すべからず。我則ち佛、我既に解りたりと云ひ、
又是心是佛と云ふて心の外に法なしと云へども、經論に依らずばさとりにあらず。心法にもあらず。佛法
にもあらず。⁽⁴⁶⁾

この遺文にも、「天魔」、「教外別傳」とあり、やはり能忍のことを指すと考えられる。また、禅宗を「佛心宗」と
言う点も『見性成仏論』と同様である。⁽⁴⁷⁾後半には「我則ち佛」、「是心是佛」、「心の外に法なし」など語つていたこと
も明らかである。「我則ち佛」と同様の語句は『見性成仏論』に、

「菩提即我なり、我即菩提なり」⁽⁴⁸⁾、「衆生是心即佛の談をば遠く聖者に譲り」⁽⁴⁹⁾

などに散見できる。また、「是心是佛」、「心の外に法なし」は、同じく『見性成仏論』に、大珠慧海のことばを引
用して、

「心是佛なり。佛を將て佛を用いることなかれ。心是法なり。法を將て法を求ること用いることあざれ」と
云へり。⁽⁵⁰⁾

とある。

以上をまとめてみよう。『日蓮遺文』のなかで能忍と推定できる人物が言うことばは、「心性の月」、「禪宗ひとり眞
性を見て余人は見ず」、「我則ち佛」、「是心是佛」、「心の外に法なし」などである。これらは、能忍の法語と思われる
『見性成仏論』のなかで、問者が語ることばと同様か、極めて近いものであることは明らかであり、能忍を語る上で
『見性成仏論』は頗る重要な資料であると言えよう。

(4) 大日房能忍以外の禅宗批判

『日蓮遺文』において、禅宗の批判の対象が大日（房能忍）を指す場合、聖一、道隆を指す場合、または人物を特定せず禅宗に関わる人を指す場合があるようである。ここでは、聖一及び道隆を指す場合について考察する。

聖一、道隆の名前を挙げる『日蓮遺文』は多いが、概ね「東福寺の聖一」、「建仁寺の道隆」と記述する場合が多く、彼らが「教外別伝」であることを記す以外、聖一・道隆の詳しい禅思想については記述されていない。例えば、『破良観等御書』では、

「良観・道隆・悲願聖人等が極樂寺・建長寺・壽福寺・普門寺等を立てて、叡山の圓頓大戒を蔑如するが如し。」⁽⁵¹⁾
とある。また、『妙法比丘尼御返事』には、

「建長寺の道隆聖人は輿に乗りて奉公人にひざまづく。諸の五百戒の尼御前等ははく（帛）をつかひて、でんそう（傳奏）をなす。（中略）教外別傳のあまきふる酒にえはせ給ひて、さかぐるひ（酒狂）にておはするなり。」⁽⁵²⁾
とある。

聖一に関しては、『眞言諸宗違目』に、

「今道隆が一黨・良観が一黨・聖一が一黨・日本國の一切四衆等は是の經文に當たるなり。」⁽⁵³⁾

と、聖一は道隆と並べて記されるようである。『小乘大乘分別鈔』にも、

「當世の禪師・律師・念佛者なんと申す聖一・道隆・良観・道阿彌・念阿彌など申す法師どもは鳩鴿が糞土を食するが如し。」⁽⁵⁴⁾

と、道隆と並べて記している。どちらも「教外別伝」の禅であったことを前後で述べ、日蓮にとつては、両者の禅は能忍と同じ「教外別伝」の系統の禅であったことが解る。

また、拙論でも論じたが、日蓮が「教外別伝不立文字」を批判する場合、『大梵天王問佛決疑經』を引用するとき

がある。『大梵天王問佛決疑經』は日蓮宗日向撰『金綱集』『禅見聞』に『大明録』に収められていることが書かれており、日蓮が『大梵天王問佛決疑經』を提示した場合は、聖一への批判の可能性が考えられる。

結語

以上、『日蓮遺文』に「大日（房能忍）云く」と明記されていないが、能忍とその禅について記述されている部分を読み取った。

まず、『念仏者追放宣状事（山門申状）』には、「近來二つの妖怪有り」とあり、妖怪の一人が他の『日蓮遺文』の記述から能忍であることが明らかであることが解った。その結果、能忍の行実などが明らかになった。

第一に、能忍が学問仏教を否定し、「聖と凡」を分けずに一般の人々に対して熱心に禅を教えた様子が見えてきた。第二に、既に『聖光上人伝』や『元亨釈書』などで明らかになっていたが、能忍が他僧との議論を避けるような態度をとっていたことも確認された。第三に、能忍が専ら坐禅をして、禅定の中にさとりがあることを公言していたことも明らかにした。今まで、『興禅護国論』の「達磨宗」の記述が能忍を指すものと考えられてきたため、能忍は坐禅もせず、寝つころがっているものと思われてきたが、実際は坐禅のプロであった可能性をみる事ができた。そうであるならば、栄西や道元の能忍に対する見方は、従来考えられていたように強い批判的な眼差しであったのかどうか疑問が生じる。今後の課題となろう。

次に、『日蓮遺文』には、日蓮が「大日（房能忍）と明記せずに「禅宗」「禅家」と書き、その人物の話していたことばが記されていることも解った。それらは、例えば「心性の月」、「己、佛に均し、凡夫にして佛と同位なり」、「禅宗ひとり眞性を見て余人は見ず」、「我則ち佛」、「是心是佛」、「心の外に法なし」などである。いずれも能忍の法語と思われる『見性成仏論』の中で、問者が語ることばと同句であるか、または内容が極めて近いことが解り、やはり、

『見性成仏論』は能忍に関わるものである根拠と成り得よう。

大日房能忍については、資料が乏しく不詳な面が多かったが、『日蓮遺文』には能忍の行実などが所々記述されており、能忍の人物像が新たに明らかになったことは、平安か鎌倉時代の初期禅宗について解明する上でも、また、能忍が祖師と思われてきた「達磨宗」というグループの実態を知る上でも大きな意味があると考える。但し、あくまでも日蓮の認識の中での能忍像であるので、果たして実態がその通りであると考えられるには、注意を要することを添えておきたい。

最後に、本論文で明らかになったところの大日（房能忍）について記述している『日蓮遺文』について以下に記す。⁵⁶

① 「大日」と明記する遺文

『教機時國鈔』、『安國論御勘由来』、『開目鈔』、『法門可被申様之事』、『佐渡御書』

② 「禅宗」、「禅家」と記するが大日（房能忍）を示唆する遺文

『念仏者追放宣状事（山門申状）』、『新池御書』、『萬法一如鈔』、『法華初心成佛鈔』、『妙法比丘尼御返事』、『諫
暁八幡抄』、『眞言諸宗違目』、『呵責謗法滅罪鈔』、『下山御消息』、『頼基陳状』、『教行證御書』、『早勝問答』、『禪
宗天台勝劣鈔』

【註】

- (1) 古瀬珠水「二〇一三」「再考—大日房能忍と「達磨宗」—」（鶴見大学仏教文化研究所紀要）一八、同「二〇一三」「日蓮関係文
書に表れる大日房能忍とその禅について」（『多田孝文名誉教授古稀記念論文集「東洋の慈悲と智慧」』）
- (2) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、二四五頁。
- (3) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、四二三頁。

- (4) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、四五三—四五四頁。
- (5) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、六〇七頁。
- (6) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、六一五頁。
- (7) 平成二十五年七月三十一日、駒澤大学にて行われた「第一回禅宗研究会」において、高橋秀栄氏が講演（達磨宗研究の回顧と展望）をされ、同時に配布された資料によって『念仏者追放宣状事（山門申状）』を知り得ることができた。高橋氏の資料収集に改めて感謝申し上げたい。
- (8) 『昭和定本日蓮聖人遺文 三』、二二七一頁。
- (9) 『昭和定本日蓮聖人遺文 三』、二二二六頁。
- (10) 「かちん」は「濃紺色」。
- (11) 尼無求は、大乘寺本『六祖壇経』の奥書にも「施主尼無求」の名前が記されており、禅宗に造詣が深く、財力のある尼僧であったことが解る。
- (12) 「四二右」に「文治五年、遣宋使婦朝時、宋国佛照禅師、送遣新渡心要、有先段無後段、而奥有此伝心偈等。已上十八行二百七十七字、此是秘本歟。大日本国特賜金剛阿闍梨能忍、為弘迴之、広灯心要後段了彫繼之也。後賢悉之。彫料浄施財者尼無求」と記されている。（『ブレ・カンファレンス真福寺大須文庫聖教展観—中世宗教テキストの世界—ワークショップ』「榮西と初期禅宗に関する新出初期禅宗聖教断簡の復元」資料集・真福寺大須文庫における中世宗教テキスト展観図録、二〇〇八年七月、四三頁下）
- (13) 同上、四七頁上。また、「真福寺新出版名法語」に関しては、拙論「二〇一〇」「真福寺新出「仮名法語」に関する試論」（『仙石山仏教学論集』五）を参照。
- (14) 「此兩義國土に充滿せり。天台眞言の學者等、念佛・禪の檀那をへつらい、をそるる事、犬の主にををふり、ねづみの猫ををつるがごとし。」（『開目鈔』）、「名は天台・眞言にかりて其心も辨め高僧の天魔にぬかれて」、「天台眞言等の學者、王臣等の檀那皆奪ひとられて」（『法門可被申様之事』）。
- (15) 前掲、拙論「二〇一三」「再考—大日房能忍と「達磨宗」—」及び同「二〇一三」「日蓮関係文書に表れる大日房能忍とその禅について」を参照。
- (16) 『金沢文庫資料全書仏典第一卷禅籍篇』、一九三頁下。
- (17) 「次に佛心宗はただちに心性をさとり、知覚をあらはす（を）詮とす。故に執指□實のそしりをまのがれて、學語翫砂のせめを

- 離れた。そへに、修因得果は迷人の教えなり。了心无相は覺者の宗なればなり。」(『金沢文庫資料全書仏典第一卷禪籍篇』、一八三頁上—下)。「愚人は文字を習う。智者は心性をさとるといふこと真なるかなや。」(同上、一八四頁上)
- (18) 例えば「略して、一家円宗の四教の心を述ぶべし。三藏教には三祇に六度行を修し、百劫に四八の業を植え、自行化他の功德円満するとき、菩提樹下にして三十四心に断結成道するを、佛になるとは言うなり。乃至、円教には六即の次位を立てて、六輪断惑を判(ず)。それ薄地衆生理。即ち、凡夫、知識(に)従い、經卷従いて法なりと聞き、文習うに一切法皆是佛法(と)さとのなり。(中略)そもそも、隔ても無く、異ならざりける佛性真如、如何がさとり知るべきと言うに、觀行相似、(の)位を経て、内には十法成乘觀智を凝らして、ほかには万行諸波羅蜜の修行をな(一) (し) 經典讀誦し、佛法を解説す。」(『金沢文庫資料全書仏典第一卷禪籍篇』、一八一頁上—一八二頁上)。拙論『見性成仏論』における修行論については、二〇一四年『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』(第一五回)に発表予定である。
- (19) 『統群書類従』第九号上、三〇頁上。
- (20) 『大日本佛教全書』一〇一卷、一五七頁上。
- (21) 「向下」は「向上」の反対語として禅宗ではよく使われる。他人にことばの意味を説明したり、概念的なことを持ち出したりすることを言う。例えば「師有時云。横説豎説菩提涅槃真如佛性。總是向下商量」『雲門匡真禪師広録』中(『大正藏』四七、五五七中)。
- (22) 古田紹欽氏は、初期禅宗において菩提達磨の禅と他派(僧達)の禅の違いを「教外別伝」と「教伝」とし、『続高僧伝』卷一六の習禅初の記述から「講授を主とする禅を教傳の禅とすれば、講授を主としない禅を教外の禅とみるものが出来よう。」(一九六五)「教外別伝」ということの歴史的背景「初期シナ禅宗史の一問題として」、『東方宗教』二五、二七頁上)と理解されている。達磨禅以外の禅者が「講授」つまり、仏經の教えを口に出して言うのに対し、達磨禅(教外別伝)は口に出すことをしなかつた伝統があることが理解できる。かつて八宗の講者であった能忍は、人前で講義をし、論議することに長けていたと考えられるが、達磨禅(教外別伝)を習得してからは、人とは議論することを避けていたことが推察される。
- (23) 『昭和定本日蓮聖人遺文』一、四五四頁。
- (24) 古瀬珠水「二〇一」「見性成仏論」と『顕密問答鈔』の「禅門の人」の関係について(『仙石山仏教学論集』六)
- (25) 『続真言宗全書』一三三、三四頁上。
- (26) 『昭和定本日蓮聖人遺文』一、一四一五頁。
- (27) 『昭和定本日蓮聖人遺文』三、二一八八頁。

- (28) 館隆志氏によれば、采西も円爾も「面壁」坐禅を行っていたようであり、能忍も「面壁」坐禅であったと考えられよう。(館隆志「二〇一」『鎌倉期の禅宗の坐禅について』『アジア遊学』一四二)
- (29) 古瀬珠水「二〇一四予定」『見性成仏論』における修行論(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』(第一五回))
- (30) 「或る人妄りに禅宗と称し、名づけて達磨宗と曰う。しかも自ら云く、行無く修無く、本より煩惱無く、元よりはれ菩提。是れ故に、事戒を用いず、事行を用いず、只た応に偃臥を用うべし。何ぞ勞して念佛を修し、舍利を供し、長齋節食せん耶と云々。」(『大正藏』八〇、七下—八上)
- (31) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一四一—一四五頁。
- (32) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一五五—一五九頁。
- (33) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一八四—一八六頁。
- (34) 『金沢文庫資料全書仏典第一巻禅籍篇』、一七九頁下—一八〇頁上。(筆を執りて書か(む)とすれば、大海に墨繩を打たむに似たり。言をもて語らむと思へば、虚空を嚙むに異ならず。然りと雖も、指をもて月をさし、蹄をもちて菟を捕ることなきにあらず。但し、指をまほりて、月忘れ、蹄握て菟捕らずば、何ぞ空に向いて星を数え、海にのぞ(み)て砂子を弄ばんに異□(な)らず。然れば、説かむを聞きては、ことばを執せずして、直ちに心をさとり、あらわすべし。)。また、『金綱集』「禅見聞」の「見性成佛義」には「但、指を瞻て」とある。(『日蓮宗宗学全書』一四卷、三〇八頁)
- (35) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、六三八頁。
- (36) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、七八七頁。
- (37) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一三二—一三九頁。
- (38) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一三四—一三八頁。
- (39) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一四八—一四八四頁。
- (40) 古田紹欽「二九五八」『日蓮教學の思想成立形態—對法然教學の問題にふれて—』(『印度学仏教学研究』七—上)
- (41) 『昭和定本日蓮聖人遺文 三』、二〇五—二〇頁。
- (42) 『金沢文庫資料全書仏典第一巻禅籍篇』、一八四頁下。
- (43) 『昭和定本日蓮聖人遺文 三』、二〇六—二〇六三頁。
- (44) 高橋秀栄「二九七七」『大日房能忍と達磨宗に関する史料(一)』、二六頁下。

- (45) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、四五四頁。
- (46) 『昭和定本日蓮聖人遺文 三』、二〇四七—二〇四八頁。
- (47) 「次に佛心宗はただちに心性をさと知り知覚をあらはす(を)詮とす。」(『金沢文庫資料全書仏典第一卷禅籍篇』、一八三頁上)。
- (48) 『金沢文庫資料全書仏典第一卷禅籍篇』、一七七頁上。
- (49) 『金沢文庫資料全書仏典第一卷禅籍篇』、一七九頁上。
- (50) 『金沢文庫資料全書仏典第一卷禅籍篇』、一八四頁下。
- (51) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、二二七八頁。但し、数行置いて「禪宗の法師等は教外別傳とのゝしりて、一切經をばほんぐ(反古)にはをとり、我等は佛に超過せりと云云。」とある。「禪宗の法師等」とあり、この一文は道隆個人について記述しているとは考えにくい。
- (52) 『昭和定本日蓮聖人遺文 二』、一五六八頁。
- (53) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、六三九頁。
- (54) 『昭和定本日蓮聖人遺文 一』、七七九頁。
- (55) 前掲、拙論「日蓮関係文書に表れる大日房能忍とその禅について」、五六七—五六九頁。
- (56) 今後、『日蓮遺文』における真筆と偽筆の研究成果により、拙論も修正される可能性のあることをお断りしておく。

〈お詫びと訂正〉

拙論「再考—大日房能忍と「達磨宗」—」(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第一八号、二〇一三年)、一八〇頁一行目「覚晏が能忍から」は「懐契が覚晏から」に訂正します。ここにお詫び申し上げます、お書き変えをお願いいたします。